2F-19
特15
488
135
4
749

落合直澄著

知道初步

第壹卷

東京　神宮教院教務課發行

	誤	正
序同	物まめやかに	物まめやかな
同同	知道要言に	知道初歩
跋同	勇に	庸
同同	玉梓に	玉梓
葉二	をちしをに	をち〳〵を
同同	たよりに	たとり
同一		

	正	誤
行六		
七末		
二七		
末		

人皆曰。良藥不レ中レ疾。則不レ見二其功一也。是無レ他。其用レ度與二否而已。此篇五章二十九節。簡意至矣。就レ中勇欲二章尤爲二所要。少之益。斑白者亦反二之躬。必有二寡レ欲補レ過矣。古人曰。寸鐵殺レ人此之謂歟

明治十九年二月

三輪田高房識

[illegible]

知道初歩序

ふゝれしあいさま〳〵あれとみち〳〵とき方よおく
れたらむよいよれおきさあひや少らるへきいはむやさ
るすちのてよおらむ物いもおふる見とおろありてを
しへそさよもならそもせいかけていふよもたらさら
ましさもぬへきふしみ心とゝ免て物まめやよかきと
らむとそふみといふ數みいいら免いまおの知道要言
とんへるもそないち其つらみて道みつきく〳〵もくあ
むおもひもたゝ免つるをゝかてかひと悦せさるべ免
予らわさとがましくぬさちてうけとりさる物いひも

るゝこまうためぞかし
明治廿七年九とせ廿三月　田中頼勇しるす

知道初歩

落合直澄著

敬愛第三章

海を渡る者海路を知らざれば岸に達り難く山を行く者山路を知らざれば巓に臻り難し人をして人の道を知らず漫に進むときは危し何をか道といふ敬愛信勇欲智の度に適るときは之を道と云神世より云ひ傳けらく父母を見れば尊く妻子見れば慈し愛しみ父母を見れば自敬する心起り妻子を見れば自愛する心起るも人情なり天然具備せる性情を詳らかなし適度を誤

らさる之を道を脩むといふ之を大よそれが天下を治むべく之を小よそれが一身を保つべし

二段 家に在ては父母長上を敬ひ子弟從僕を愛し他に在ては尊長を敬ひ少幼を愛そべし敬は愛を受け愛は敬を受く敬せらるゝより愉快はなく愛せらるゝより嬉きはなし故他人は敬すべく子弟は愛すべし敬愛上下の禮は由て名を異にすれども

三段 形敬を見ては心驕るものは眞の敬はあらず形愛を示して心酷きそれは眞の愛にあらず兵士は身に槍劍を携帶し形殺伐を主とする如なれども其槍劍は虎狼を狩て

國民を護る具なり形麗なるも愛その中にあり

四段 愛は親疎等差あり人民悉く愛すべしと雖親戚朋友は及ず親戚朋友愛すべしと雖子弟は及ず民を愛するは度あり限ある財を以て限なき天下の窮民を救むとするは國君と雖能ず施そべきは施さずして施すべからざるに施すは惰民を作るなり一ひとし眼前の人の疾苦を見て見るに忍びず之を救ふは愛の發輝なり

五段 天下の爲に身命を抛擲し人民の爲に私欲を放棄すること之を敬愛の至りとす

信第三章

一段（我〻世の事能こそ神習へ現青人草習へや物償はぬ）と古來愚俗を道み背けること多し愚俗み習て神乃正行ふ習ざるは人れ道よあらす商れ如きを射利れ策多きもれ也策を用うるい商の習あり然とも策の施すべき處よ施さゞして人を陷れるれい一時利を射るとも雖い

二段 軍も亦商のごとし將帥よりて保勝の策あけきが人を損ひ財を費し國つをよ亡ぶ機よ臨み變よ應じ奇策あるべからず策や正計あり毛し國を愛護する念あく漫よ軍を起し我を利せむとする者い賊あり策も亦偽あり

三段 人窮すれい濫る猛省自戒むるよ非れい濫ざるを得ざるあり智能有て飢渇よ迫る者少しと雖天災病疾い小智のよく防く能ざるものあり此時よ當て信と死を共よす亦勇士の行爲と云べきあり

四段 借て返すを怠れい活動を失ふ借るよ麁あるも返すに密ならざるべからす期を誤らざるも禮儀密ならざるが詮なし活動世界よあり て活動を失へが苦しむ〻

五段 親戚朋友の醜を見して已か直を示さむとし人の陰語を傳へて人の災を顧〻ざるが如きい惡むべし我位置

を有むる爲に人を陷いき我用らきむおとを欲して人を讒するが如き最も惡むべし他人の功を功とし我功を功とせざるは陰德なり他の功を殺して我拙を補ふ之を何とか云む

勇第三章

一段 人勇なけきば事を遂る事あさわす勇は果敢なり(海行が水漬く屍山行が草生す屍)を大海に一葉の船山嶮み一枝の杖を以す其艱難如何そや世路は山海を越るよりも尙難なことあり勇なけれは行べからず

二段 人性天賦の勇あり男は女み比それは骨格氣勢甚だ勇あり幼稚の時より嬉戯にも戰狀に擬し槍劍を取て自ら英傑に比するか如き女子も自ら異なり此勇養成せざるべからず耐忍は尤勇の事なり怠慢遊樂勇なけきが自ら戒むる能はず飲食衣服勇なけきば節する能はず事業勇なけきは興らず交戰勇なけきは敗る

三段 智を養成するは學業なり學業勇なきれば成らさし

一 醬酢に蒜搗加て鯛願ふ我になる見せそ水葱の養物)と大志を中止して小成に安むするは勇なければなり

四段 道の爲に親族財産をも顧ざるとあり區區たる私情を斷ざれば天下に大功を建る能はず是小を捨て大を

取る所爲まして私情を壓抑するの勇あるれば能わざ
るなり（[illegible]）

欲第四章

一段

欲の天賦の良能なり然るを能其欲を節制せざれ
却て憂苦の基をなる是天然の反動響なり欲の願あり
欲廢れの萬物滅るを近らむ兒生れて乳を求るの欲の
始なり左乳を白まれの右乳を手まし右乳を白まれ
きの左乳を手まず欲の萌芽既に備れり壯るを及て
欲彌盛なるを老るを從ひ稍衰へ曰欲財欲嗣欲を存し
て死に至るを世俗の常とす

二段

凡そ欲を計るきの數多あり耳欲目欲鼻欲口欲色欲名
欲威欲識欲財欲嗣欲等あり（此漂へる國を修理固成せ
と人今日に至て事理を發明し器械を製造し國土開拓
經營するが如き皆欲の活はもて此神勅に由るなる
も人事[illegible]（[illegible]）

三段

彼にの美味美聲美香美色を備へ此にの耳目鼻口の欲
を賦し倦勞れ患を醫し人をして勤勉修理の功を奏せ
しむる妙機に至ての感歎せざるを得ず世を厭ひ欲を
棄心を月花に委むとするの神の掟に背くものあり（天
の行ば汝がまに〳〵地あらば大君坐す）と空に翔む人

ならべ咎免き地上みれ君み對する義務彼我乃交際あ
り遁むとするを得べからず月花乃好景を呈し白雪紅
葉の美觀を現すを閑散無事を事とする惰者の爲ふ神
の作り出せるものは非ざるべし

四段

身心の强弱智愚を顧ゝず藝學財産れ有無を量らず漫
に大事を爲むことを企るゝ危し（高き山も麓の塵土よ
り成れり）人の今日の富貴を見て曩に幾多の艱難を
歴しことを考へず徒手富貴の花を手折むと欲す溝壑に
陷るほかなからんのみ

五段

一年の計は春にあり終身の計は少年にあり少き時情

欲を節制せざれは身体强健ならず藝業成就せず況て
恣に結婚を要し人は子の少きを憂ふる世に在て獨子
の多きを怨むに至る貧困に陷きゝ智勇之ゝ爲に退縮
し終に成ほとあるべからず

六段

人に天賦の位置あり富貴の家に生れ或ゝ美貌威相自
ら備へり或ゝ智慮英邁生れながら人に勝れる者ゝ天
賦なり我彼に學術能力を比るに劣ず同く職に當
て勤勉彼に勝る彼ゝ常に幸福をうれども我ゝ然るを

七段

得ざるものゝ天賦の位置異なればなり
人我を落さゞ我吾を落さゞと我地位を失ふに當て讒者

を求め或は人を怨咎するの迷へるなり之を我行爲中
に求めが必悟る所あらむ

八段

財欲威欲の恨多きを他の産を取て我産を興し威力人
を壓するなり道を以て進むと雖俄に富貴に昇る者
は小人の爲に嫉る嫉む者も我財欲威欲彼ダ如く伸る
能さるまよるる

九段

強て取むとするれが強て與ぎらむとす之を取るも奪ふ
が如く奪はるるが如し

十段

色欲は欲中最も重し色欲有て夫婦あり禽獸蟲魚に至
る迄一も此欲有らざるなし夫は婦を愛護し婦は夫を

敬愛す雞の雄は威あるを雌を蹴るなく雌は恭順雄
に從はざるなし愛情熟して子孫繼嗣す(銀宅金宅玉宅
何せむに勝る寶子に及ぬやを)と財欲深しと雖嗣欲に
及ざる遠し繼嗣は色欲の結果なり色欲は最も深厚な
るが故に智と勇とを以て嚴に之を節制するにあらざ
れは名譽を毀損し信用を失ひ甚しけれは身古滅人

智第五章

一段

欲情を節制し(本末傾けを中らふる人中臣と云ふ)と能
く中度を失はす善惡を分ち敬愛信勇の度を守るを智
なり天下國家を治め萬機の理を發明し天下に幸福を

與ふるハ智ふあらざれど能はざるなり

二段

人の禽獸の上に位し禽獸に勝所以の者は何そや空を翔むとするも飛鳥ハ羽なし山を走むとするも走獸ハ爪なし海を渡むとするも魚介ハ鰭尾なし大を比れは象駝に及ハず强を比れは虎狼に及ず然るに虎狼人を恐れ人能く虎狼を制する者ハ唯智あるを以て也

三段

欲を節制するハ智と勇とあり禽獸も欲を節制する智なし故に孳尾の期あるに色欲を恣にするを能ハず羽毛の定ありて財欲なし蜂ハ六方形の巣を作り蜘ハ八面狀の網を布くも其智變化あるとなし人も神

の特惠ふ由て恣ふ萬物を使用する權を有し又靈妙不測の智を以て欲を節制するとを知る

四段

善惡多くは情欲の適度過度の二ふ基す適度なる者は順ふして善なり過度なる者ハ逆ふして惡なり此處ふ美玉あり價千金と云べし業を勵み財を積み之を買ハ誰ら之を咎めむ牆を破り壁を穿ち之を奪ハ盜なり其之を得るふ至りてハ一なり順逆ふ由て善惡分る智なき者ハ逆を取て罪を獲るなり

五段

夏ハ冷を善とし冬ハ暖を善とす男ハ勇壯を善とし女ハ恭順を善とす一物一行時と物とふ由て變化せざる

あし唯智其變化を解悟するはあらされば危し

六段

萬物の使用度に適すれは福となり適せされは禍となる水火は一日も無るべからざるも水はして堤防宜しきを得ざれば良田一朝は湖海となり火にして保護全からざれば財寶家屋一夕に灰燼となる米麥は人命の係る所なれども過食すれば胃腸を損ぜ禽獸蟲魚草木も至るまて使用度も適せきれば益あり適せざれば害となる害あるて益なき物あるか如きは人未使用の法を解せざるあり度を知るは智あり

知道初步跋

久方は天よりおろせる玉梓は道ある國そ今は我國とよそ給ふしは古しへの聖乃帝は御歌にこそあるもしらさる正しき道も言擧して世にあらをすおとなかるせを誰かさやすく蹈とくべき我學乃兄なる落合は直澄ぬしのおるさきさる知道初步は皇典乃中より事後要とあるおとをつみ出しをちしを分ちて道の道たる旨をなむ教へ諭さきけるもとよりて言少なく詞みしを知物なるおとをも明らに心深けきは世乃爲ふはたよりよき道のおるへとも多りておよそ知ふさをとや云

まし今より老たるも若きもおれを栞として入とし入らむよいたよりゝたき道蹈わけむにおそゝたゝるべきおのか一言書加へて世にひろむるべこきゝ爲なり

明治乃十まり九年二月　宮地嚴夫おるす

明治十九年十一月　日出版御屆
同　年十二月　製本御屆

著者　東京府士族　落合直澄
麹町區三番町廿八番地

出版人　高知縣士族　宮地嚴夫
同區有樂町三丁目二番地

014387-000-4

特15-488

知道初歩　第1巻

落合　直澄／著

M19

ABB-0753